

日本のモータースポーツイベント参加者の特性に関する研究

スポーツマーケティングゼミナール 1313010 市川 雄大

1. 研究動機・研究目的

自動車産業は世界就業人口の 10%が従事しており、世界をリードする産業である。その中でも、自動車大国と呼ばれている日本においては全就業人口における自動車関連就業人口は全体の 8.8%を占める 548 万人（日本自動車工業会,2013）と高い数値であり、雇用は安定している。さらに、世界における日本の自動車メーカーは台頭を見せている。しかし、日本でのモータースポーツは、レースの開催数やライセンスの発行数の低下にみられるように、興味関心が薄れていることがわかる(JAF 公式 HP,2016)。現在、日本でのモータースポーツに関する研究はほとんど行われておらず、ファンの特性を活かしたマーケティング手法なども公表されたものは見当たらない。

一方、大衆のエンターテイメントとしての地位を確立しているアメリカの National Association for Stock Car Auto Racing (以下「NASCAR」)をはじめとする海外のモータースポーツに関する研究は深化しており、ファン特性を基にしたマーケティングも行われている (Kyu-sooChung et al,2015;Christie H Amato et al,2005)。Amato(2005)では、NASCAR ファンの分類を行い、類型化及び分析をすることでファンのステップアップを促し、今後の NASCAR を支える新しいマーケティング分野の発展や、アメリカのスポーツの人気の獲得、収益の拡大にもつながることが予想されると述べている。そこで本研究は、日本のモータースポーツファン増加に寄与するために、筑波サーキットライセンス会員を対象とした会員走行会参加者を対象に質問紙調査を行い、それを基にファン特性を分析し類型化を試みる。

2. 研究方法

本研究では、2016 年 10 月 19 日(水)に筑波サーキットで開催された筑波サーキット会員（国内 A 級ライセンス取得者）を対象とした会員走行会及び、2016 年 11 月 26 日(土)に行われた、耐久茶屋 2016 筑波耐久ロードレースの参加者及び観戦者を調査対象とした。また、11 月 19 日(土)に行われた筑波サーキットライセンス講習会についてもアンケート調査を筑波サーキット関係者に委託して実施した。サンプル数は会員走行会で 83 部(2 輪 51 部、4 輪 32 部)、筑波耐久ロードレースで 100 部、ライセンス講習会で 17 部の計 200 部であった。

3. 主な結果と考察

今回のサンプルを 3 つの基準（モータースポーツ関連イベントへの参加回数・モーター

スポーツに関するメディアの視聴時間・グッズにかけた金額) から、3種類 (Hardcore・Moderate・Casual) に分類した。その結果、Hardcoreは13.2%(n=25)、Moderateは67.7%(n=128)、Casualは19.0%(n=36)で、Moderateが多い結果となった

Amato(2005)と比較すると、今回のサンプルは、「40歳代」のカテゴリが最も多いことから平均年齢が42.6歳と高く、男性が多い。年収も高いことから金銭的な余裕がある点ではAmato(2005)と一致している。しかし、既婚の割合が約半数であることから、独身で金銭的な余裕があり、自分自身で使えるお金をモータースポーツに使うことのできる男性が多いことが推察される。家族でモータースポーツを観戦に来ることやモータースポーツとかわる機会が少ないのではないかと考えられる。3つのファンカテゴリごとに個人的属性とのクロス集計を行ったところ、3つのファンカテゴリすべてで、男性の割合が高く、同伴者の項目もすべてで「友人」が多かった。Hardcore Fanは収入が高いことから、金銭的な余裕があることが分かった。Hardcore Fanの職業には「会社員」と「自営業」のカテゴリが多く、定職についていることがわかった。また、最終学歴は「高校」「専門学校」のカテゴリが多いことから何らかの特別な資格を取得し、職業としていることが考えられる。同伴者には「友人」のカテゴリが多く、調査時の聞き取りにおいて、サーキットで意気投合した仲間と来場しているという話も多く聞かれた。Casual Fanは収入において「900万円以上」のカテゴリを選択したサンプルが0であり、収入面での自由に趣味につき込むことのできる金額が他に比べて少ないことが推察される。

4. 結論

Amato(2005)の研究と類似した結果になった。しかし、今回調査したサンプルはアメリカでのモータースポーツ文化のような家族ぐるみの交流や観戦といった点が不足しており、個人の趣味の段階を抜け出せない印象を受けた。また、家族の理解を得られないことで時間的・金銭的な余裕があってもモータースポーツに没頭できない環境があることが考えられる。また、地上波テレビでの放送が少ないことや、自らが積極的に働きかけることでしかモータースポーツに関する情報を得ることのできないメディアの現状を改善する必要があると考えられる。また、メディアはマスメディアを通してファンとの結びつきを強めることで、家族の理解や周囲の環境の改善がみられるかもしれない。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の作成に当たり、多くの方にご協力をいただいたことに感謝申し上げます。質問紙調査にご協力してくださった一般財団法人日本オートスポーツセンター筑波サーキットの方、調査依頼に協力してくださった方、共に励ましあったゼミ員、そして最後まで丁寧にご指導いただいた工藤先生。1人では決して書き上げることはできませんでした。自分が楽しんでできるテーマを選んだことから、思いが入ってしまう場面が多々ありましたが、脱線せずにやりきることができ、嬉しく思います。ありがとうございました。